

「2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学 総合人間学部 3年 深谷拓未

異文化理解において、最も重要なことは、やはり現地の人々との交流と現地への環境への順応ではないだろうか。今回のプログラムでは、大学主催の語学講座・文化講座・共同発表会・現地見学会に参加し、それぞれベトナムを知る上でとても有意義であったが、それ以上に現地学生との交流が私にとっては最も印象に残った。お互いに相手の文化に興味を持ち、多少の言語の障壁はあれ、いろいろな方法で自身の文化を伝えるだけでなく、相手の文化について少しでも深い理解をしようとしていた。そうした対話を通して、あらたな文化差を知りえ、更なる興味を感化されたことは言うまでもない。ハノイは近年急な経済発展と人口増加により、交通問題や環境問題は山積みである。インフラ整備が立ち遅れる状況での生活は、私たち派遣生にとって、多少なりとも不自由や不満を伴うことでもあった。しかし、事前の準備やその場での最善策を模索し、然るべき対応をして環境に順応していったことは、今後我々が各々別な海外経験をしていく上で有効に働くはずである。

私は文化人類学を専攻していることもあり、このプログラムはその調査方法の実践という意味も持ち合わせている。可能な限り現地の人々と交流し、現地の人々に似た生活をするように心がける。その中で文献調査や資料では決して発想し得ない文化の理解や文化に対する考察をするのであるが、私がそうした理想的な文化理解ができたとは言いがたく、特に観察と記録という面で足りないところがあったと認めざるを得ない。今後さらに文化人類学を継続し、いずれ本格的なフィールド調査をしていくことになるのだが、今回の調査経験を反省し、研究をよりよいものにしていきたいと考えている。

最後に、このプログラムに携わり、支援下さった大学の関係者の皆様に感謝いたします。今回得た経験、友好関係を大切にしつつ、グローバルな分野で貢献していけるよう努力を重ねる次第です。